

夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

(第4回)

コンサートの帰り道

去年の11月、東京フィルハーモニー交響楽団の第912回定期演奏会に行った。ボーイト作曲の歌劇『メフィストフェレ』のコンサート形式による公演であった。弱冠30歳の指揮者バッティストーニは絶妙なタクトで、大編成のオーケストラと合唱、歌手たちを統率した。その見事な演奏に酔った私は、心が高揚して帰り道、友人と音楽談義に時間の過ぎるのを忘れた。コンサートの楽しみは、帰り道にもある。

夏目漱石と寺田寅彦も、コンサートの帰り道を楽しんだ。陽気にはしゃぐ漱石の姿を、寅彦は何度も見ていた。随筆「夏目漱石先生の追悼」では、こんなエピソードが語られている。

上野の音楽学校で毎月開かれる明治音楽会の演奏会に時々先生と一緒に出かけた。ある時の曲目中に蛙の鳴き声やらシャンペンを抜く音の交じった表題楽的なものがあった。…帰り道に精養軒前をぶらぶら歩きながら、先生が、そのグウグウという蛙の声の真似をしては実に腹の奥から可笑しそうに笑うのであった。

寅彦の随筆には、「蛙の鳴声」というのもあって、二人が神田の宝亭で夕食をとったことがわかる。大好きな青豆のスープと小鳥のロースに舌鼓を打ち、数杯のアルコールに酔った漱石は、蛙の鳴き声をまたも真似して笑っていたという。

明治38年10月29日、東京音楽学校の第13回定期演奏会の帰り道は、新橋で夕食をとり、銀座や日本橋のイルミネーションも見物して、漱石は夜の九時頃に帰宅している。

ところで、当時の日本で最高の演奏会といえば、東京音楽学校の「定期演奏会」であったが、第12回までは政府関係者や外国の要人、著名な文化人など、いわゆるVIPだけが聴けた。招待券が配られたのである。やっと第13回から、一般人にチケットが販売されるようになった。漱石と寅彦は早速チケットを購入した。明治38年10月29日は、二人が東京音楽学校の「定期演奏会」というものを初めて聴いた日であった。帰りが遅くなったのには、ヴァーグナーの『ローエングリン』の前奏曲で鳴ったシンバルのことで、話が尽きなかったからかもしれない。というのも、4年後の明治42年、寅彦がベルリンから漱石に宛てたハガキに、こう書いているからである。

…ウーバーチュア（前奏曲）の例のガヂヤンで可笑しくなりました。

日本はまだ洋楽の草創期だったので、東京音楽学校のシンバル奏者は下手で、「ジャン」ではなく、「ガヂヤン」と鳴らしたのであろう。本場の歌劇場でシンバルを聴いた寅彦は、そのときの「ガヂヤン」を思い出して可笑しくなったのである。

*引用文は、『寺田寅彦全集』（岩波書店第二回配本）を使用。